

多文化共生の社会をめざした国際理解教育

- 地域の素材・人材を生かした国際理解の学習活動の構成 -

国際理解教育研究会議

研修員 加藤 香代（川崎市立今井小学校） 首藤 弘明（川崎市立富士見台小学校）

多和田律子（川崎市立富士見中学校） 高橋 仁子（川崎市立有馬中学校）

研修指導主事 佐藤 裕之

主題設定の理由

川崎市の国際理解教育は、教育施策の基本である「多文化共生」と川崎市総合教育センター国際理解教育研究会議が開発した「国際理解教育目標構造図」を柱に、長い歴史と多様な実践が積み重ねられてきている。併せて平成14年度、新学習指導要領の全面実施で新設された「総合的な学習の時間」の学習活動として、国際理解などの課題が例示され、各校ではその実践にさまざまな取組が行われるようになってきた。しかし、最近の取組の中には、外国人市民等のゲストティーチャーを招いて、「世界の食べ物」「世界の遊び」のような体験・交流をねらいとしたものが多く、児童生徒には楽しい時間になっているようだが、一方で「交流活動に重点が置かれすぎて、学びが不十分、育ちが不明確」といった新たな問題が聞こえてきている。さらに実践を通して、交流等での学習に継続性が弱く、内容が異文化理解に偏る傾向、そして課題が身近な生活から乖離していること、児童生徒にどのような力が付いたか分からないなど、様々な課題が指摘されている。

そこで本研究会議では、研究主題を「多文化共生の社会をめざした国際理解教育 - 地域の素材・人材を生かした国際理解の学習活動の構成 - 」と設定し、児童生徒にとって、身近で継続的な学びのある国際理解の学習活動の在り方について研究することにした。

研究の内容

1. 研究の内容

(1) 地域に関連した国際理解の題材を分析し、単元を開発する。

地域の中にある国際理解の授業題材として適当な素材・人材を検討し、それらを有効に活用した単元を開発し、授業実践する。

(2) 国際理解の授業における児童生徒の活動を見取る。

国際理解の授業を通して児童生徒が、どのような活動を行い、学習を進め、力を付けていったのかなどの評価の在り方について研究する。

2. 研究の方法

(1) 地域の国際理解に関する素材を収集・検討し、学習活動の構成を検討する。

子どもたちにとって、身近で継続性のある学習活動であるため、地域の素材・人材を有効に活用した題材を検討し、授業づくりを研究する。特に地域の学習力を活用し、地域の特色や文化を理解し、多文化共生の心が育つ学習活動を検討する。

(2) 検証授業・評価・授業考察、そして子どもの活動と評価を見取る。

子どもたちの学習活動には、その経過を記録するための活動と評価の「見取り表」を開発し、それをもとに子どもの変容を探る。

3. 検証授業

(1) A小学校

第3学年 総合的な学習の時間

「自分のまちの紹介番組を作ろう」

単元について

3年生では、社会科・総合的な学習の時間に地域の学習を行ってきた。地域の一員でありながら、地域の人やものや自然とのかかわりの希薄さを実感していたからである。そこで、直接体験・調査活動・聞き取り取材など地域の人・もの・自然に主体的に出会い、かかわる中で、自分の住んでいる地域のよさに気づかせたいと考えた。それが地域社会の一員として自覚し、地域理解・自文化理解につながっていくと考える。

本単元では、地域について調べ、分かった地域の特徴を紹介する番組を作ることにした。番組づくりを通して、自分たちのまちを振り返り、さらに調べたことを再構成してまとめることによって、地域を見つめ直し、そのよさを自分たちから発信していく力を育てたいと考えたからである。

単元目標

- ・自分たちで課題を見つけ、地域のもの・人とかかわり、自分のまちを主体的に調べていこうとする。
- ・調べたことや伝えたいことを、友だちと協力しながら工夫して、いろいろな方法で表現する。

国際理解教育の視点

- ・自文化理解
自分の住んでいる地域を調べ、知ることで、地域社会の一員としての自覚を持つ。
- ・自己表現力・行動力
調べてきたことが、分かりやすく伝わる方法を考え、協力して番組を作り、地域のよさを知らせる。
- ・コミュニケーション能力
聞き取り調査など地域の人との直接的なかかわりを通して、コミュニケーション能力を高める。

活動の流れ (29時間)

課題設定	オリエンテーション(1時間) 学習の進め方を知る。
	たんけんしよう ~いいところ, いい人を見つけよう~(16時間) <ul style="list-style-type: none"> ・地域のことでもっと調べたいことやしてみたいことを決める。 ・同じような課題をもった人とグループになって調べる。 ・調査活動, 聞き取り, インタビュー等を取り入れ, 活動の計画を立てる。
課題追究	<div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div style="border: 1px solid black; border-radius: 15px; padding: 5px; width: 18%;"> お店グループ 「商店街比較」 お店で働く人 お客さんの思いを探る。 </div> <div style="border: 1px solid black; border-radius: 15px; padding: 5px; width: 18%;"> 工場グループ 「東横車輛見学」 安全にバスや電車を つくるための努力を探る。 </div> <div style="border: 1px solid black; border-radius: 15px; padding: 5px; width: 18%;"> 畑グループ 「パンジー農家 の方の思い」 畑を訪ね, 見学取材 農家の方のパンジーに 対する思いを探る。 </div> <div style="border: 1px solid black; border-radius: 15px; padding: 5px; width: 18%;"> 自然グループ 「渋川の生き物 調査」 生き物の種類・すみ かを追う。地域の方 に教えてもらう。 </div> <div style="border: 1px solid black; border-radius: 15px; padding: 5px; width: 18%;"> 昔グループ 「昔の学校の様子 子どもの生活」 地域のお年寄りに取 材。子どもの生活を 今と比較する。 </div> </div> <p style="text-align: center;">探検したことをまとめておく。</p>
	2年生にいいところ, いい人伝えよう(7時間) <ul style="list-style-type: none"> ・たんけんして調べてきた地域のよさを2年生に伝えることを知る。 ・何をどんな方法で伝えると分かりやすいか話し合う。 ・発表会をしよう。(劇化・クイズ・ペープサート・実演・紙芝居・模造紙・地図・写真)
まとめ	地域の紹介番組を作ろう(5時間) <ul style="list-style-type: none"> オリエンテーション 脚本づくり 番組づくり練習 番組づくり本番 感想交流 <ul style="list-style-type: none"> ・地域紹介番組を作ることを知り, 地域のよさについて考える。 ・地域のよさについて話し合い, 脚本をつくる。 ・表現方法を工夫し, 友だちと協力して練習する。 ・友だちや地域の人と協力して, 調べたことを表現する。 ・作ったビデオ番組を見合い, 自分たちの地域を再認識する。

ねらい 着目児童	第1時 オリエンテーション	第2時 番組づくり (脚本作り)	第3時 番組作り (練習)	第4時 番組作り (本番撮影)	第5時 感想交流 (ビデオを視聴して)	児童の全体評価
	地域紹介ビデオを作ることを知る。どんな番組を作るか話し合う。 B-1	伝えたいことは何か考えて脚本をつくる。 B-1 C-2	友だちと協力して練習する。どこを撮ったらいいか表現方法を工夫する。 C-2	云わりやすいように、自分の役割を責任を持って行う。 C-2 C-3	お互い作ったビデオを見合い、地域のよさを再確認する。 B-1 C-3	
渋川グループ Aさん(男) 生き物に興味を持っている。地域との関わりも多く、好奇心旺盛。	番組を作る際、今まで調べてきたことについて番組を作りたいと主張。たくさんの人に知らせたいと意欲満々。積極的に話し合いに参加	脚本作りの中心的存在。みんなの意見を聞きながらザリガニの取り方を中心にまとめている。朝自習、休み時間を利用してすでに作っていた。	練習(感想)より、今日は、どんどん進んだ。ザリガニの捕まえたも分かってもらえると思う。渋川に行つて練習。ビデオ撮影しながら変。臨機応変に対応。	放課後、撮影。ビデオを見ながら、撮り方についても注目を付けて行く。3度撮影直し。納得がいかず、3度撮影直し。納得のいくまで撮る。	出来具合に大満足。他のグループの番組にもどうやったらもっと伝えるか自分の意見を伝える。さらにより番組にするための意見をどのグループにも伝える。	渋川の生き物ということと日頃の遊び場として伝えている場所を持って進んでいた。
パンジー-グループ Bさん(女) 一つ一つじっくり取り組み、自分の考えをしっかりと持っている。植物に興味がある。	パンジー農家の原さんに焦点を絞って番組をつくることに決めた。実際前回調べた児童はBさん1人のため、内容については詳しく知っている。原さんの畑に何度も足を運んでいる。	オリエンテーション後、協力して脚本を作る。他の人の意見を取り入れ、みんなで納得しながら進めている。伝えたいことを整理し、原さんの気持ちを大切にしていた。	アップウォッチを使って、2分という時間を気にしながら練習。時間を決め、伝えるポイントをしっかりと押さえることができた。時間、原稿に忠実に練習。演出のため小道具も作る。	原さんへのインタビュー形式にした。実際に畑に行つて撮影。緊張気味だが、流れをしっかりと頭に入れて、友だちに指示をする。休みの日に来て最後のチェックを行う。2度撮影直しを要求。	恥ずかしそうに観ていた。パンジーが中原区の花として大切にしたいという気持ちが高まったようだった。	もともと植物が好きで、今までの経験で、もともと自分から農家の方に聞きたいという意識が出てきた。今回も思ったパンジーを中心になって育てている。
全体を通して	番組作りという内容が、子どもたちの興味を盛り上げた。全体的に話し合いは活発だった。グループは興味別グループになり、ほとんどの児童は、調べたビデオと同じグループを選んだ。	一度まとめた内容をビデオ番組という形で再構成したが、一人一人意識して取り組む。伝えたい内容を把握しているために予想以上にスムーズに進んだ。意見に言い合い、話し合いが分裂したグループが2つ。	各グループ熱心に練習している。2分以内を意識して取り組む。と場所、せりふの言い方、小道具などもつくって練習していた。	はじめてのビデオ撮影という形に、興奮していた。撮り終わって、ビデオを観ながらもう一度撮り直したいというグループが多く納得のいくまで撮影をした。	ビデオ視聴は、満足なようである。多くの人に見せたいという意識がますます高くなる。撮り直したいというグループも出てきた。	番組作りという体験も、今までなかった。とても魅力的な2分間の時間を2分間も出さず、伝えたい内容がはきり

実践を終えて

紹介ビデオ番組づくりという活動を通して、子どもたちは、地域で調べたことを再構成する学習に取り組んだ。この学習の過程で、再三地域を訪ね、人とかがわり、課題に対する答えを探り続ける姿が見られた。抽出児童と学級全体の活動と学びを、上記の評価の見取り表をもとに、まとめてみた。

【地域のかかわりが多く好奇心旺盛なAさん】

Aさんは、この活動を通して、積極的に地域とかがわりを持つことができた。興味が持続した要因として、「二ヶ領用・渋川の生き物について」という課題が明確になっていたこと、何度も川に足を運ぶ中で地域の住民と仲良くなり、生物のすみか・さがし方など教えてもらったり、一緒に活動したりできたことがあげられる。番組づくりでも実際に地域の人から教えてもらったこと、それをもとに体験したことが番組に再構成された。自然や人との出会いが多くなるほど五感を働かせる感覚体験・感動体験・達成体験が増え、自分が分かったことを知ってもらいたいという意識が強くなった。

また、ビデオ試写会では、自分のグループだけでなく、どのグループの番組も自分の町という視点に立って、感想や意見を発表していた。

【地味だが課題にじっくり取り組むBさん】

Bさんは、中原区の花になっているパンジーを育てている農家を追った。はじめは、花好きという自分の興味が動機付けとなり、パンジーの種類や育ち方に焦点をおいた。1回目は、畑に見学に行き、仕事の様子を見たり、パンジーをスケッチしたりした。2、3回目からは、関心がパンジーからそれを育てている農家の方に移っていた。何度か足を運ぶうちに話しかけられるようになり、番組づくりでは、農家の方の気持ちに焦点を当てようと提案した。番組はパンジー畑で現地取材を行い、農家の方へのインタビューを中心に組み立てた。撮影後も交流は続いている。学校に地域の方を招くのではなく、その人が活動している現場に子どもたちが出かけることで仕事に誠実に取り組んでいる人の魅力を感じたことだろう。継続的なかかわりの中で、相手の思いや願いを感じることができた例である。

【学級全体を通して】

着目児童に限らず、今まで調べてきた地域のことを発表やまとめだけに終わらず、まち紹介番組として再構成したことで、再度地域を客観的に見つめ直し、学びが深まった。また、自分たちで番組を作るという行為は3年生にとって新しい表現方法であり、とても魅力的であった。

授業以外でも自分たちで足を運び、地域の自然や人と積極できにかかわろうとする子が多かったことは地域教材の魅力の一つだろう。地域のさまざまな人とかがわり、それらの人々のよさに学びながら、地域の一員として自分のまちを知る・好きになるということは、地域理解・自文化理解にもつながったと考える。

(2) B 中学校

第1学年 社会科・地理的分野「身近な地域を調べよう」

「川崎に見られる他地域文化～沖縄を例として～」

単元について

川崎市は外国人市民や他県出身者の多い街である。特に沖縄出身者は、川崎区在住の50人に1人という状況であり、本校にも「祖父母の代から川崎で暮らしている」という生徒が、各クラス1～5名程度在籍している。しかし、そのことを認識している生徒はごくわずかである。学区内に沖縄文化に縁のあるものが多いこと、「沖縄労働文化会館」が存在すること、駅前で「沖縄物産展」が頻りに開かれることなど、それらを生徒たちは、疑問とせず受け止めている。このような地域の特色を観察・聞き取り調査等を通じてとらえ、また、沖縄の人たちが川崎に多い理由を考察させることによって、私たちの街が「多文化共生の街」であることを理解させたいと考え、この単元を設定した。

単元目標

- ・自分たちが生活する身近な地域が、どのような地域なのかを調べ、地域の特色をとらえる「視点」や、「調べ方」「話し合い方」「まとめ方」などの基礎を身につける。
- ・川崎在住の他県・外国出身者の割合や、現在川崎に存在する他地域の文化についての調査を通じて、川崎が「多文化共生の街」であることを理解する。

国際理解教育の視点

- ・平和・共生への態度
自分たちが生活する地域にある、異なる文化を理解し認め、共に生活していく態度を養う。
- ・多文化理解
川崎に様々な地域の文化が存在する背景や、日常生活にとけ込んでいる様子を理解する。
- ・自己表現力・行動力
各自が課題を設定し、課題解決の方法を考え、実際に観察・聞き取り調査などを行う力を養う。調査・考察した内容を、工夫してまとめ、自分の思いを的確に相手に伝える。

・コミュニケーション能力

グループ学習を通じて、協力して課題に取り組むことの大切さを理解する。

指導計画(7時間)

	時	学習活動	活動内容
つかむ	1	身近な「他地域の文化」を探そう	<ul style="list-style-type: none"> ・川崎市の人口・歴史を調べる。 ・自分・親・祖父母の生まれた地域を確認する。 ・身の回りの他地域文化を理解する。
調べる	2	わたしたちの街にはなぜ沖縄出身の人が多いのだろう	<ul style="list-style-type: none"> ・「沖縄」のイメージマップを作成する。 ・川崎と沖縄のつながりが見える小テーマ(課題)を決定し、班ごとに分担する。 ・具体的な調査項目を考え、調査計画を立てる。
	3		
	4 5 6	資料の収集をしよう	<ul style="list-style-type: none"> ・休日・放課後を利用して、資料を収集する。 ・収集した資料・情報を、班の中で発表し合い、課題を追究する。 ・個人レポートを作成する。
深める	7	発表会をしよう	<ul style="list-style-type: none"> ・各班の代表者が調べたことを発表し、その情報をクラス全体で共有する。
		川崎の発展の歴史について考えよう～なぜ他県出身者が多いのか	<ul style="list-style-type: none"> ・川崎の発展を支えた(支えている)ものについて考える。 ・なぜ川崎には沖縄出身の人が多いのかを考える。 ・川崎の発展について、これまでの学習を踏まえて考える。

評価「見取り表」平和・共生への態度(A-3) 多文化理解(B-2) 自己表現力・行動力(C-2) コミュニケーション能力(C-3)

時数	着目生徒 小テーマ ねらい	Cさん(女)「沖縄の物産店」 駅伝練習で時間の確保が難しかったが、聞き取り調査を実施	Dさん(女)「伝統楽器・三線」 普段は発言もほとんどなく、授業は受け身的	学年全体を通じて
第一時 ワークシート	身の回りにある「他地域の文化」理解 B-2	阿波踊り、シーサー、ゴーヤチャンプルー、きりたんぼ、笹かま、ソーラン節、長崎チャンポン 周囲の意見からヒントを得て、自分で2、3個思いついている。	ラーメン、クッパ、キムチ、ハムスター、ブルコギ、ビビンバ、紅葉まんじゅう、コムタンスープ、ソーキそば、杏仁豆腐 すべて自分で考えたが、視点が絞り込めていない。	日常生活にとけ込んでいる「他地域の文化」を異なる文化としては、なかなかとらえられない。商店で見られる料理・食材に関する発言がほとんど。芸能は小学校の運動会で体験。シーサーは学校の校外行事でほとんどの生徒が沖縄労働文化会館の屋根にあるのを確認している。
第二時 ワークシート	「沖縄」に対するイメージ 川崎の中の「沖縄」の認識 B-2	自然・動物、料理、魔よけ、戦争、サミット、方言、建築 食材、料理、物産店、シーサー、石敢當、方言 海・気候・動物などの発言が多い	自然・動物、料理、基地、アメリカ、三線、「ちゅらさん」 シーサー、三線、チャンプルー、エイサー、民謡、物産店 イメージがなかなか広がらない	「沖縄から連想されるもの」「見たことがあるもの」「川崎で見たことがあるもの」の順で絞り込み。他の市では見られないことを補足すると、沖縄に関連するものが川崎に多いことを実感したようである。
第三時 ワークシート	具体的な課題設定 明確な課題意識 適切な資料収集方法 A-3 C-2	「沖縄の物産について」 ・売っている物 ・店の歴史 ・仕入れ方法 ・聞き込み 当初は物産店に行くことを計画。「川崎と沖縄のつながり」について調べようと意識している	「伝統楽器・三線について」 ・三線とは何か ・川崎にある三線教室 ・インターネット、本 調査の手順について、具体的に考えている。	各班の小テーマそのものに関する調査項目が多く、「川崎と沖縄のつながり」を追求するところまで意識した班は少ない。補足説明・動機付けが不十分。
第四時 調査活動	課題設定と追究 資料の適切な取捨選択 C-2 C-3	市民祭りでの沖縄県人会の出店で聞き取り調査を実施。聞いたことを元に、なぜそうなのか考察	自分で決めた聞き取り調査実施日前のため、資料なし。	クラスによっては、日程が厳しく、ほとんど資料を集めてこれなかった。資料のない班は、資料収集の方法について考えた。
第五六時 調査活動	課題追究 C-2 C-3	資料のまとめ 個人レポートの作成	インターネットで、近所の三線教室の場所・連絡先を調べ、直接聞き取り調査に行く。 実際に三線を弾かせてもらうなど 実体験をすることができ、かなり関心が高まった。	資料収集率がかなり高くなる。インターネットの検索時に「沖縄」と「川崎」両方をキーワードにして、必要な情報を集められた生徒もいた。
個人レポート 23	資料からの考察とまとめ 川崎に「沖縄」が多い理由～ 歴史的背景の確認 A-3 C-2	・出店の商品 ・県人会の始まり ・沖縄と川崎との価格の差 ・沖縄には仕事が少ないが川崎には多い 「仕事」について自分で考察している。	・三線教室を開いている理由 ・どれくらいの人が習っているか ・若い女性たちの集団就職 聞いてきたことを、うまくまとめられない。	「川崎に沖縄の人が多い理由」は、ほとんどの生徒が配付した資料から引用。そこからさらに、70～80年前の沖縄・川崎の状況を調べた生徒も学年で3、4人いた。歴史から背景を探る生徒が現れた。
第七時 ワークシート	調査内容の発表 今後の川崎の発展の方向性 A-3 C-3	自分の班の代表として、調査内容や意見を発表。 個人レポートに載せた「川崎に沖縄が多い理由」も自分なりに考えて発表。質問も積極的。	「他の地域の文化を学びあいながら生活していく」 川崎に根付く他地域の文化を実感できたので、素直な感想として出てきている。	発問「現在は不況で閉鎖される工場も多い。しかし工場は消えても移ってきた人と、持ってきた文化は消えずに残る。さて、これからの川崎はどんな街になればいい？」今後の川崎と沖縄について考えた。
冬休みの課題	「川崎にいる沖縄の人の思い」についての聞き取り調査 C-2 C-3	呉屋民謡研究所へ ・川崎に沖縄の人が多い理由 ～地震の時、沖縄の人が援助に 来た ・三線が川崎にある理由 ～沖縄の人の5人に1人が三線を持っていて、発表会を開いたりした。	呉屋民謡研究所へ ・苦労～言葉が伝わらない ・喜び～川崎の人が三線の稽古に来た ・来た理由～川崎の人に三線を教えるようにした ・大切にしていること～方言、三線	クラスを解体して再度班編制・テーマ設定を行った。本単元で調査したものを引き続き選択した生徒がほとんど。実際に沖縄出身の人と会話をすることによって、人々の思いや守られてきた文化を、今後自分たちはどうしていけばいいのかが、考えを深めることができた生徒もいた。
生徒の全体評価		他地域文化の存在だけでなく、「なぜ存在するのか」まで追究しようとする姿勢が見られた。 B-2, C-2, C-3	聞き取り調査を実践したことにより、文化の存在だけでなく、文化を守る人の思いまで、追究することができた。 A-3, B-2, C-2	

実践を終えて

地域の中の沖縄文化を課題に、子どもたちは様々な方法で調査に取り組んだ。抽出生徒の活動と学びを、前頁の評価の見取り表をもとに、まとめてみた。

【興味・関心が旺盛なCさんの学び】

当初から「川崎と沖縄のつながり」を意識しながら活動に取り組んでいた。市民祭りでの沖縄県人会の出店に対する聞き取り調査でも、小テーマ(沖縄の物産)に関する質問にとどまらず、「なぜ川崎には沖縄の人が多いのか」についても質問し、「川崎には仕事が多い」という回答から、その具体的な仕事について、歴史資料や地図を調べて考察した。冬休みの課題では、さらに深く追究するために小テーマを変更して三線教室へ赴き、沖縄の人・文化が多い理由やその様子を自分の足と目と口と耳で課題解決に取り組んだ。

【日常の学習では、消極的なDさんの学び】

学習の第1,2時までは、前向きに取り組もうとしているものの、何を追究していくのかという視点がうまくつかめていなかった。しかし、三線教室の場所を調べて実際に訪問し、演奏者から話を聞いたことにより、文化を守る人の思いを深く感じる事ができた。個人レポートではうまく表現できなかったが、その後も課題を持ち続けている。冬休みには再度同じ三線教室を訪れて、川崎での生活や文化継承活動の喜びや苦労、大切にしていることなど、人々の具体的な思いにまで触れ、その文化を学び、共に守っていこうという気持ちが理解できた。

研究のまとめ

1. 研究の成果

- ・地域と密着した学習題材を選ぶことにより、関心・意欲が普段以上に高まり、体験的な学習の場面が多く保障でき、学習内容を実際の生活場面で生かすことができた。そして、課題意識が高まり、継続性のある学習へと発展することができた。
- ・はじめは気づけなかったことが、繰り返し交流することで、地域や人の違う部分、新しい部分が見つかり、相手への思いがふくらんで、課題に対して興味や関心を高めることができた。
- ・子どもたち一人一人の活動を具体的に記録することにより、学習過程における意識の変容を具体的な資料で追うことができ、教師自身が個別の学習支援の方向性を考え、展望を持つことができた。また、活動の見取り表が、学習終了後の総括をするうえでも大変有効であった。

2. 今後の課題

- ・地域素材として発展性のある素材とそうでない素材があった。学習計画の段階で、地域の素材・人材を提示し、子どもたちが意欲的に継続して取り組める課題を精選していく必要がある。
- ・課題が多岐にわたり、各自がそれぞれ異なる活動をしているとき、子どもたちの学習を十分に把握する時間が確保できず、子どもをつまづきに即座に対応することができなかった。開発した評価の見取り表の有効活用や個別指導の方法について、更に検討することが大切である。

最後に、本研究を進めるにあたり、適切なご助言をいただいた先生方、研究をご支援していただいた研修員所属の校長先生ならびに教職員の皆様に心からお礼申し上げます。

【参考文献】

- 佐藤郡衛, 林 英和 『国際理解教育の授業づくり』 教育出版 1998 年
佐藤郡衛他 『国際をテーマにした学習活動 50 のポイント』 教育開発研究所 2002 年
法政大学第2 高等学校社会科学部 『川崎の中の沖縄 - 豊かな居場所を求めた人たち』 2002 年

【指導助言者】

- 東京大学大学院助教授(川崎市総合教育センター専門員) 恒吉 僚子
川崎市教育委員会学校教育部指導主事 伊藤 民子